

学校経営のポイント

中国・東北師範大学附属小学校の取組み

若井 彌一

本年9月11～16日、共同研究の打合せで中国の東北師範大学（长春市）と北京師範大学、中国教育部を訪れた。その際、共同研究のメンバーの一員としてご協力いただいている東北師範大学・熊梅（シュン・メイ：女性）教授が校長をされている附属小学校を参観する機会を得た。

児童数約8,000人の“超大規模校”

事前に聞いてはいたものの、同校が超大規模校であることを実感したのは、午前の全校児童の健康体操の様子を見たときである。といっても、正確には、筆者が見たのは、本校4,000人の児童を2班に大別して実施している健康体操のうち、早いほうの班2,000人の体操風景である。

校内グラウンドに3つの出口から、バックグラウンドミュージックに乗って、整然とはいかないまでも、各クラスごとに校舎内からグラウンドに順々と集まってくる。

全員が集合すると、体操が始まる。全児童の前の一段高い位置にリーダー（1名）と模範生数名が立って、体操をリードする。太極拳と護身術の演技を織り交ぜたような体操を、全児童が大きな声で唱和しながら元気に行う様子は、じつに迫力がある。

熊校長の説明によれば、健康体操の内容は、学校独自に考案したものであるという。授業時間の間を活用して、毎日、実施しているとのことである。

読者諸氏は、4,000人も児童が在籍する小学校をイメージできるであろうか。この附属小学校は、長春市のなかでは、いわゆる名門校であり、入学希望者が殺到し、従来から設置されていた本校（1948年設置）が4,000人、そして1998年に新設された分校（南校と呼んでいる）も、約3,700名を数えるにいたった（校長は、両校を兼務）。

これだけの数の児童を抱えたら、学校の安全管理がさぞや大変なことであろうと思われ、校長にたずねたところ、「そのとおり」という。

伝統の強みと開発的実践校としての魅力

この附属小学校がなぜ、多くの保護者にとって「子どもを入学させたい学校」であるのか。1つは、やはり世評の高い大学の附属校であり、地域に知られた存在であることである。

しかし、よく考えてみると、単に伝統校であるというだけではない。むしろ、この小学校がオープン・スペースの施設を有していたり、英語は1年から6年まで一貫して徹底して取り組むというような開発的な経営姿勢を積極的に打ちだしていることが、より大きな理由のようである。それを支える「実力のある教師」が集まっているという。

この小学校の04年版要覧「東北師範大学附属小学」（校はつかない）で、校長の実績アピール、学校の多彩な取組みのアピールをしているだけでなく、学校の校門に入ってすぐのあたりに設けられている掲示板には、ところ狭しと学校での取組みが、見る者の関心を引くような工夫のある文章と写真で紹介されている。保護者が午後、学校まで児童の出迎えにきた際、満足そうな表情で掲示板をながめていたのが印象的であった。

伝統は、「守る」という一面が強調されやすいが、その伝統は、不断の新たな開発的な取組みを通してこそ、より確かな輝きを増していくことに気づかされる。

（わかい・やいち＝上越教育大学教授・附属小学校長併任）

…本紙は、購読料不要です。配信の中止・FAX番号変更等をご連絡くださる場合は、抹消・登録に必要な【あて先/新旧のFAX番号】を必ずご明記ください。

●新刊案内● 小川正人（中教審委員）【編】A5判220頁・定価2310円 教育開発研究所刊
中教審委員等第一線の研究者・実践者が解説！ 全国の先進的実践例を多数紹介！

義務教育改革—その争点と地域・学校の取組み